

杉本苑子

古典を読む

13



伊勢物語

勢物語

杉本苑子

岩波書店

杉本苑子

1925 年東京に生まれる

作家

『孤愁の岸』(講談社), 『滝沢馬琴』(文藝春秋),

『檀林皇后私譜』(中央公論社)など

伊勢物語

1984 年 4 月 19 日 第 1 刷発行 ©

1985 年 10 月 20 日 第 2 刷発行

定価 1700 円

著 者 すぎもと 杉 本 その 苑 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

『伊勢物語』のうさんくささ

3

軽み、そして鄙^{ひな}びと貧

47

アウトローの自覚

87

業平に至る血の系譜(一)

135

業平に至る血の系譜(二)

167

二条の后と惟喬親王

195

物語を生んだ心理的母体

229

附記

259

皇室・在原氏略系図

藤原氏略系図

伊勢物語

『伊勢物語』のうさんくささ

冒頭から『伊勢物語』を「うさんくさい」などと決めつけては、お叱りを蒙るかもしれない。もし、そう言っきて悪ければ、「曖昧あいまいさ」と訂正してもよい。どちらにせよ、一部SFマニアだけがその飛来を信じている未確認物体さながら、『伊勢物語』には「わからない部分」が多い。

執筆にとりかかる前にこころみに私は、三、四人の女性に『伊勢物語』を知っているかと、個別に質問してみた。彼女らはいずれも戦前の高等女学校、もしくは旧制専門学校の国文科か家政科ぐらいを卒業し、子育て終了後はアサヒ・カルチャーセンターなどに出かけて、『万葉集』『源氏物語』のお講義を聴こうという婦人たちである。したがって、「知っているか」などという初歩的な問いかけにはいささかムッとした面持ちで、全員が知っているかと答えたが、どんな内容か、だれが書いたものかと訊くと、口ぶりは少々あやふやに

なつた。

「むかし男——で始まるのよね、いろいろな話が……。でも主人公は業平なりひらでしょ。だから書き手も業平自身だわ、たぶん……」

「在原業平の恋愛遍歴をつづった歌物語。業平の作じゃないかしら……」

おおよそ、こんな調子である。そしてこの辺が日本人大多数の、『伊勢物語』に抱く平均的な概念ではあるまいか。

与謝野晶子の初期の歌に、次のような一首がある。

春曙抄に伊勢をかさねて嵩足かさたらぬ

枕はやがてくづれけるかな

『春曙抄』は言うまでもなく、「春はあけぼの……」で始まる『枕草子』だけれど、その下が「源氏を」でも「更科さらしなを」でも「竹取を」でも字余りとなって落ちつかぬ。それなら「土佐」ではどうか。「春曙抄に土佐を重ねて嵩足かさたらぬ」なら字数の上では納まるが、気分からすれば今ひとつ、しっくりしない。やはりみやびお男の代表格である在ざい五中將の、愛の物語でこそ明星派のローマン主義に似つかわしく、うたた寝の夢にまで優美な想像が拡がるのである。晶子の心象の中にも、むしろそうした配慮なり計算なりが働いていたで

あろうし、つまりこれもまた、先のアサ・カル夫人らの発言と同じく、『伊勢物語』の一般通念を一首の歌に盛り込んだものといえよう。

しかし『伊勢物語』を、在原業平の作と言い切ってよいか。「むかし男」を業平本人と断じてよいのだろうか。そういう大雑把な通念なり概念なりで括くくってしまつてかまわないか、となると、答は否いである。

複数説だの宇治十帖別人説はあるけれども、『紫式部日記』などの記述から推おして、少くとも『源氏物語』の主要部分は紫式部みずから書いたことにまちがいないし、『枕草子』は清少納言、『更科日記』は菅原孝標すがわらたかすえの女、『蜻蛉日記』は右大将藤原道綱の母、『土佐日記』は女流めかした紀貫之の筆に成る、とは、一応、学界の定説だ。ところが、このように作者が判はつてゐる作品群と違ちがつて、『伊勢物語』の場合、書き手を明確に固定できない。「作者不詳の古典なら他にもいくらでもある。なにも『伊勢物語』に限かつたことではないではないか」との意見もある。たとえば『源氏物語』の中で「物語の祖おや」に位置づけられてゐる『竹取』なども、うまく出来たお話なのに作者はわからない。『落窪物語』『平中物語』、すべて同様である。

もし組み入れるとすれば、正篇を赤染衛門、続篇を出羽ノ弁でわべんが書いたとされる『栄花物語』

語』や、時代は少しさがるが一条兼良説・二条良基説などいろいろ挙げられているにもか

かわらず今なお作者を特定できずにいる『増鏡』、あるいは伝承の中で源隆国とされながら、本気ではだれもが隆国一人の作とは信じていない『今昔物語集』のごときジャンルに、『伊勢物語』ははいるかもしれないけれど、やはりやや、それらとは質を異にする。

そもそも今日、ありがたがって私たちが読んでいる『伊勢物語』は、流布本によって多少の差はあれ「新・伊勢物語」と称してよいもので、その出現以前に「原」と言おうか「元」と言おうか、もしくは「古・伊勢物語」と呼ぶのが妥当か、ともあれ現行の『伊勢物語』の種本となったものがあったのだそう。

ではその種本の筆者が業平か、といえば、そうも言いきれない。業平がまったく正体を晦まして書いているところがあるかと思うと、アカの他人のくせに業平本人になりすまして或る部分を分担執筆した人間もいたようだし、幾人か集まってあれこれ生前の業平の思ひ出話にふけりながら、

「彼ならこの話にきつと食指を動かすだろうよ」

「よし、彼自身のことにすり変えて追加しちまおう」

とその歿後、加筆にいそしんだグループまでいたらしい。

業平本人やら彼の韜晦^{とうかい}やら、他人の擬態やら他人そのものやら、当事者めかした改竄^{かいざん}やら補注やら、好意的とも作画的ともいえるお節介な筆がおびただしく加わって、原本をイースト菌よろしく膨らませ、一個のパンに仕立てあげたのが現在、私たちの眼前にある『伊勢物語』なのだ。臙化^{おぼろか}と、しゃれた表現でおっしゃっている国文学者もおられるけれど、虚実入り乱れ、まるで取りようによっては、わざと後世の読者を惑わしてやろうと企らみでもしたような曲りくねった成立過程を経て出現した意地のわるさ、複雑さ……。まさにこれは、『伊勢物語』にのみ見られる特質で、「うさん臭い。曖昧だ」との、つげに私が言ったのはこのことである。

ユニークととればとれるこの特性ゆえに、しかし『伊勢物語』は、ほかの古典にない魅力を発揮しているとも評せるわけで、たとえばあきらかに『伊勢』の模倣と断じてよい『平中物語』の平板^{へいばん}さに比較すると、双方の相違ははっきりする。

『平中物語』は、延長元(九三三年)に左兵衛佐で亡くなった平貞文^{たいらのさだふみ}のエピソードを三十篇余り集めたもので、そのほとんどが女との愛情交換に材を取った歌物語である。したがって底本となったのは貞文自身の私家集だが、『伊勢物語』では『古今集』所載の業平の歌が、三十首ほど採用されている。

それならば『古今集』こそが、『伊勢』の原典かと思うとさにあらず。『古今集』より以前に例の「原」の字を冠してもよい「古・伊勢物語」がすでに存在し、なお、それよりさらに溯れば『業平私家集』なる歌集の存在も想定されてくる。『古今集』はむしろ詞書^{ことばがき}な^{さかのぼ}どを「古・伊勢物語」からそっくり転用してのものである。

そしてそれ以後、先に述べたような増幅をくり返しつつ、変容し肥大化していったのが現在の「新・伊勢物語」……。しかも変容増幅のプロセスの中で、今度は逆に『古今集』を再度、資料として採り入れた形跡すらあるのだからややこしい。

整理すると、こうなる。

『枕草子』のように作者がはっきり固定でき、その作者個人の手でストレートに生みだされたと判断してよい単純明快な作品……。『竹取』のように作者は不明ながら、はじめからほぼ現行の形のまま後代にまで読み継がれてきたと思える作品……。これらは縞馬^{しまうま}の赤ちゃんが縞馬の母親からパッと生まれたようなもので、誕生の当初から毛皮の文様も姿も親のミニアチュア……。だれが見ても、縞馬以外の何ものでもないというわかりやすい例だし、『平中物語』のように、主人公の歌集を材料にしてその行状を短篇に仕上げたというだけの作品は、パンダの赤ン坊の誕生である。生まれ落ちたときは全身ぶよぶよの、

白っぽいピンク色……。小さくてネズミの仔みたいなのに、ある時期に達すると体毛が変って、パンダ特有のあの白と黒の染め分けとなる。つまり成立の過程で一変節とげた例である。

ところが我が『伊勢物語』となると、さながら蝶だ。卵から青虫、青虫毛虫から蛹、蛹から成虫に二転三転する変化の妙は、予断を許さない。成り立ちからして多岐多様……。たんに「作者不明」の一言で片づけることができないのは勿論、では「作者は業平か」といえばそれも言い切れず、個人の体験談かと見れば虚構あり、中国種の焼き直しあり、それならすべてフィクションかといえれば中には事実あった事件も混る、といった具合で、内容もまた複雑きわまる。だから面白い、とも言え言えるものの、到底ひと筋縄ではいかない古典なのである。

したがって嫌になるほどたくさん注釈書・研究書のたぐいが世に出たし、この先も出つづけるにちがいない。謎の部分、わからない部分があるのは、それを説明する余地が残されているということでもあるわけだから、もうまるで人体にたとえれば筋の一本々々、毛細血管の先の先まで解剖し尽すごとき情熱を傾けて、国文学者たちは古来からこの厄介な古典に挑んできた。

「『伊勢』を読む」

という作業には、だから龐大な研究書を併せ読む愉しさも含まれるわけで、百花妍を競ううちには賀茂真淵のような珍説をとねえる先生まで登場する。真淵翁といえは江戸中期の国学者……。『万葉考』『祝詞考』などを著した斯界の泰斗と私など恐れ畏んでいたのに、とんでもない誤りを犯しているのだ。

それはどういうことか。紹介する前にまず、『伊勢物語』中一、二を争う有名な箇所、この章あるが故に『伊勢物語』なる総題が付けられたとさえ称される69段の全文を書き写してみよう。と言うのも、いままで述べてきた『伊勢物語』の特殊性が、ことごとくいってよいほどこの段に詰め込まれているからで、手っ取り早いのを好まれるかたは、69段一つをじっくり読めば、それだけでもう、

「『伊勢』は卒業」

となる。そういう便利重宝な段なのである。

むかし、をとこ有りけり。そのをとこ、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」と

いひやれりければ、親のことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。あし
たには狩にいだしたててやり、夕さは帰りつゝ、そこに来させけり。かくて
ねむごろにいたづきけり。

少々長文の段なので、ひとまずここで切って現代文に直してみよう。こまかいことはあ
と回しにし、ただ文字面^{づら}だけを追って訳してゆくが、これだけでも敏感な読者は、

「あまり上手な文章じゃないな」

と首をかしげるにちがいない。そうなのだ。「春曙抄に伊勢をかさねて嵩たらぬ」的優婉^{ゆうえん}
繊細な物語と仰がれ、古典のなかのバイブルともてはやされてきた伝統のヴェールを思
い切つて剥^はがして、『伊勢』なる物語を冷静に味読してみると、最初に気づくのは文章の
たどたどしさ、古様^{こよう}さである。

「下手^{へた}だ」

と言つてしまつては酷^こかもしれない。各段を物語全体の流れに乗つて捉えれば、それなり
にリズムがあり、文章そのものにも古様さゆえの雅味^{がみ}、わる擦^すれしない素朴な手ざわりが
感じられるけれども、これを、たとえば『源氏物語』の、

須磨^{すま}には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平^{ゆまひら}の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々^{よるよる}はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものは、かかる所の秋なりけり。御前^{おまへ}にいと人少^{ひとすく}なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方^{よも}の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくるこちして、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりけり。

と較べてみると、格段に洗練度に差があるのがわかる。『伊勢』をアマチュアの記事とすれば、『源氏』のそれはプロの文章である。

しかし、こういうことは好きずきだし、古雅な幼さ^{おきな}の中に、かえって『伊勢』の文章の魅力を見いだす人もあろう。ともかく現代文にしてみよう。意味を通じさせるだけが目的だから、私の訳など味もそ、つ、けもない直訳である。あらかじめお許しを乞うておく。

むかし、男がいた。その男が、伊勢の国に狩りの使者に行ったところが、伊勢神宮の斎宮^{いみけ}だった人の親が、「並^{なら}のお使いよりも、この人をよく労^{いたわ}つてあげなさい」と言つてよこしたので、親の言葉なので、心を尽^{つく}してもてなした。朝になれば、狩りに出かける世話を^{すまい}して送り出し、夕方には、帰ってくるとすぐ自分の住居^{すまい}に來させた。このように、